

英語教育と「コミュニケーション能力」

惣谷 美智子

宮副 紀子

グローバル化時代を迎え、また社会が急速に複雑化していく現代において「コミュニケーション能力」は、最重要能力の1つとみなされている。本論では、「コミュニケーション能力」を切口に、まず中学校、高等学校学習指導要領と、それともなう英語教授法の変遷を概観したあと、現在、英語教育の主流になりつつあるコミュニケーション・ランゲージ・ティーチング (CLT) の先駆者的存在である H. G. ウイドウソン (G. H. Widdowson) の論文を検討しながら、英語教育と「コミュニケーション能力」のありかたについて考察したい。

「コミュニケーション能力」を養う

中学校学習指導要領における外国語（英語）（2012年度より施行）の目標は、以下のようなものとなっている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。（下線は筆者による。）

他方、高等学校学習指導要領 外国語（英語）（2013年度より施行）の目標においても、「コミュニケーション」の強調は同様である。つまり中学校の場合の下線を施した部分が、さらに高度なスキル、つまり具体的には「情報や考えかたなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」（「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ」）ことに達成目標が引き上げられるが、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育

成が主眼となっていることに変わりはなく、「コミュニケーション能力」は、中・高等学校の達成目標としては、ともに欠くべからざる重要項目となっている。

こうしたコミュニケーション重視は2003年度より施行されてきた旧学習指導要領の内容と大差はないが、旧指導要領においては単に「実践的コミュニケーション」と記されていたものが、新指導要領では、その「実践」がどういったものを指すのか、上記引用の下線部のように、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなど」というように、さらに具体的に示されている点は注目すべきであろう。

以上は英語教育に関するものだが、英語、日本語を問わず全般的な「コミュニケーション能力」に関しても、その注目度の高さは、経団連（日本経済団体連合会）の調査でも明白に表れている。経団連の「2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」（回答社数：597社）によれば、「選考にあたって特に重視した点」として挙げられている第1位は、「コミュニケーション能力」（82.4%）で、16年連続の首位を保っている。以下、「主体性」（64.3%）、「チャレンジ精神」（48.9%）「協調性」（47.0%）と続くが、「語学力」（6.2%）は、17位に留まっている。経済界の要請からみえてくる、英語、日本語にかぎらず「コミュニケーション能力」自体を重視する傾向は、人間社会の根源的価値を示唆しているようにも思われる。

教育法の変化

時代の要請を受け、変化していくのは教育だけではない。しかし時代をになう教育は、とり

わけ時代のニーズが色濃く反映されるものとなる。そして英語教育の場合、特にグローバル化時代、といった緊急の要請がそれに付随する。それはさまざまな英語教育法の変遷からも明らかであり、おおまかにその流れをたどってみれば以下のようなものになるだろう。

文法・訳読法 (the Grammar Translation Method) は、日本における伝統的指導法であるが、それは、同時に「コミュニケーション能力」が最重要視される現代、「コミュニケーション能力」の養成には効果が見込めない、つまり「時代錯誤」的な教育法として反発、批判の矢面に立たされている観がある。そうした旧来の文法・訳読法への反省から、幼児の母語習得をモデルにした「ナチュラル・メソッド」(the Natural Method)、母語を使わずに目標言語のみを使用する「ダイレクト・メソッド」(the Direct Method) があり、また日本の教育現場の実情に合わせてダイレクト・メソッドを改良した「オーラル・メソッド」(the Oral Method)、構造主義言語学の考えかたを取り入れた「オーディオ・リンガル・メソッド」(the Audio-lingual Method)、そして現代は、「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」(Communicative Language Teaching, CLT)として総称されている教育法、すなわち「コミュニケーション能力の育成」を主眼とした教育法が主流とされている。そして最近では CLT の考えかたをさらに推し進めた「内容言語統合型学習」(Content and Language Integrated Learning, CLIL)も試みははじめられている。これは文字通り、「内容」と「言語」を「統合」した学びである。たとえば理科、歴史といった他教科の学習と語学学習を統合した学習法であるのだが、CLILの構想はすでに CLT の先駆者的役割を果たした H. G. ウィドウソンが示唆している。

Here again we might consider the suggestion made earlier that the

teaching of language might profitably be associated with other subjects in the school curriculum. If reading passages are combined to form a rhetorical unit dealing with matters relating to these subjects there is a chance that the learner's interest might be engaged and he might be led to recognize the relevance of foreign language study to his other school activities. In this way, the foreign language is represented as having the same kind of communicative function as his own language.

(Widdowson, 1978. 81)

ローマは一日にして成らず、“Rome was not built in a day.”おそらく日本の中・高校生ならいずれかの段階で英語の教科書を通して出合っている諺だが、英語の教育法もまた「一日にして成らず」なのである。英語の場合は当然、ローマのように700年ばかりかからないだろうが、前述したように、英語教育法の変遷は、旧指導法に対する反省、批判を原動力としている。改良に改良が重ねられて今日がある。しかし、同時に認識しておかなければならないのは、たとえば「時代錯誤」として退けられたはずの文法・訳読法も依然、健在であることである。この教授法を過去の遺物化してしまう事例がある一方で、その教授法を完全に退けた授業の弊害を示唆する事例もある。このように訳読法一つを取り上げても、教授法には課題が山積している。議論の拡散を避けるために、訳読法の是非についての議論は、論を改めて行うことにするが、教師がなすべきことは、まさに実状に応じた柔軟な対応である。

こうしたなかで、もっとも基本的な「教授法」となるのは、古代ギリシアの時代にまで遡る。ソクラテスが独自に編み出した教育法、つまり産婆術と称されるものである。この産婆術に関しては、教育とはむしろ産婆術であって、教師

自身が何かを創り出すのではない、というのが共通認識になろう。教師は生徒たちが自らの才能なり、個性なりを生み出そうとするのを手助けし、その成長を見守るのが重要な役割である。しかし、そのように考えてくれば、教師もまたある意味ではクリエイターであるかもしれない。工夫に関していえば、教師もまたクリエイターである必要がある。生徒の個性、特性、才能といったものをいかに発揮させてやるか、方向づけてやるか等の工夫である。ソクラテスが相手を正しい認識へと導く対話術を編み出したように、教育方法の研究もまた意義あるものとなる。英語教育法は広義の対話といってもよいだろう。ソクラテスはこれをアイロニーをもってしたが、まずわれわれには日々、たとえば開発されていく新しい教授法がある。新しい教授法を実際にクラスで試してみて、その効果を検証し、学生とともに教師も成長していくことは重要である。

しかし、以下に引用する H. G. ウィドウソンの指摘のように、教師は、時代、時代によって「流行していて正統とされる教育法の餌食」(“prey to fashionable orthodoxies”) にしばしば陥る危険性に曝されてきたこともまた事実である。

The teaching of language is a very complex affair and language teachers in the past have not always been encouraged to inquire into the nature of its complexity. In consequence they have frequently fallen prey to fashionable orthodoxies.

(Widdowson, 1978. 99)

ウィドウソンはロンドン大学教育研究所 (Institute of Education, University of London) で応用言語学の教授を務め、オックスフォード大学出版局の発行する Oxford Bookworms Collection シリーズの応用言語学分野のアドバイザーとして、教育実践の場とも

深い関わりをもっている。そしてまた前述したように、現在、主流となっている教授法、コミュニケーション・ランゲージ・ティーチングの分野では中心的推進力となっている。この研究者の発言、「流行していて正統とされる教育法の餌食」という表現 (比喩) の大胆さには驚かされるが、しかし、それが端的に核心をついたものであることもまた確かなのである。

それでは、英語教師はどうすればいいのだろうか。ウィドウソンは続けて提案している。

I think it is important to recognize that language teaching is a theoretical as well as a practical activity, that effective teaching materials and classroom procedures depend on principles deriving from an understanding of what language is and how it is used. (Widdowson, 1978. 99)

ウィドウソンによれば、外国語教育はきわめて複雑な様相を帯びている事柄であるが、それにもかかわらず、従来、語学教師には、その複雑性の本質をみきわめようとする探究が不足している。そして結論として、彼は、語学教育という活動は、実践的であると同時に理論的活動 (a theoretical activity) であり、まず教師は、言語の何たるかを理解することが必要であるとするのである。慧眼であろう。教師には、確かに教えようとする対象、つまり言語そのものについての正しい認識が必要である。

ここで、上記ウィドウソンのこの結論を敷衍して議論を続ければ、「教育」という行為の特殊性は、「言語」学的見識のみならず、もう一つの「対象」をも併せ持つことになるだろう。すなわち教えられる対象、「学生」たちへの視線である。極論すれば、こちらの対象 (そして学生の「試金石」としての反応) のほうが、場合によっては教育「活動」にはさらに大きな影響力を持つかもしれない。

「PPP 授業と TBL 授業の比較検証」の 結果をふまえて

そうした学生への視線を一つの切口として、以下では PPP と TBL を活用した授業を比較検証した論文「PPP 授業と TBL 授業の文法学習における効果の比較検証」（川本、佐藤、2011）を取り上げたい。この検証論文では、上記の議論に関して、まずタイトルにあるように文法説明の後に練習、活動を行うという、従来型の PPP (Presentation-Practice-Production) と、第二言語習得研究に沿ってタスクを活用した TBL (Task-Based Language Learning) の比較研究を行っている。

TBL は、教育指導要綱で強調される「コミュニケーション能力」を高める効果があるとされているが、しかし、実際にはどうなのか。PPP と TBL、これら 2 つの教育法をそれぞれ 2 グループに分けたクラスで行い、予測される効果が実際にみられるか検証している。そしてその検証結果得られるのは「文法知識の習得や英作文における正確さ」を目標とする場合には PPP 授業が適しており、また「英作文における流暢さや内容の豊かさ」の場合には TBL が適している、といった結論であり、教授法にはそれぞれの特質があることを示唆している。そして生徒側における「性格や学習への動機づけ」の多様性を考慮するなら、「さまざまな形式の授業を組み合わせ活用」（川本、佐藤 95）することが有効であるとするのである。妥当な結論であろう。

要は、教える対象である学生も多種多様なら、教授法も多種多様なものがあってしかるべきであるという、柔軟、かつ説得性に富んだ結論を導き出している。そうした結論自体、示唆的なものを多く含むのだが、それと同様、興味深いのは、そこには生徒への確実な視線が読み取れることである。これが生徒の英語力向上のみならず、授業形態に対する生徒の情意的反応をもきめ細かく精査した結果のものだということは

注目すべきである。この検証論文では、「学習者が好む、または効果があると思っている授業の方がより効果的である」という見地から、学生に対し「PPP と TBL のどちらの授業が好きか」、「PPP と TBL のどちらの授業の方が英語が身に付くと思うか」の 2 項目の質問を付加し、その解答を分析している (99)。このように、検証は教育対象である学生の反応を丁寧に掬い上げることにより、柔軟性、包括性ともいべきものを確保し、それゆえに、この検証結果は正鵠を射たものとなるのである。

AI と、人間の「本当の心(“real mind”）」

このように前述の論文の検証には、教育対象である生徒の情意面がしっかりプログラムされていたのだが、さらに論を進めて、教育における学生との心の触れ合いについて（などという、いかにも精神論的で古めかしい発想のようにも見えるが、これ）はかなり本質的な問題であると思われる。たとえば昨今、脚光を浴びている、いかにも現代的、かつ未来的産物でもある AI (人工知能) でさえ、意外なことに、その背景には「心」の存在が考えられるからである。アラン・チューリング (Alan Turing) (1912-1954) は、AI の考えかたの礎を築いたとされる「世界で最初の人工知能研究者」（森田、93）だが、彼をもともと AI へと駆り立てたのは、人間の「本当の心」 (“real mind”) に迫りたいという渴望であったという。彼は、機械的プロセスでは処理不可能な、人間の心が生み出す「洞察」、「直観やひらめき」といったものを、ひとまず「オラクルという[概念の]『括弧』に」（森田、93）入れて棚上げし、結果的には、今日の AI の先駆けとなるものを開発していったのだが、人間の内面性に対するチューリングの関心は依然、衰えることなく、彼は以下のような構想もまた披歴している。

知的な機械をつくろうとするならば、機械もまた、そうした干渉[他者との接触による外部からの影響]に対して開かれていなければならぬ。つくるべきは大人の脳ではなく、幼児の脳のような、学びに開かれた機械である。(森田、101) (下線は筆者による。)

チューリングが構想する「知的機械」(Intelligent Machinery) についてのこうした発想は、教育学的見地からすれば、非常に示唆的なものを含んでいるように思われる。なぜなら、チューリングが一時的に棚上げにしたままの「オラクル」の存在こそ、教育の分野では教育者が現実、目の前に対象としているものであり、また教育という活動の前提としているものであるからだ。AIはこの点で大いに「教育」には遅れをとっているといってもよい。否、それは、はたして単に「遅れ」といってもよいものなのだろうか。なぜなら教育とは、AIの分野が目指すような対象の解明ではなく、むしろ対象への全面的信頼、あるいは、見守りといってもよいようなものであるからだ。

政府は、ムーンショット型研究開発制度の対象となる25の目標候補の一つとして「脳などの全神経回路網を完全コピー(達成目標は2050年)」(日本経済新聞 2019年7月29日夕刊)することを挙げているが、そのころ「オラクル」はどのような形で把握されるようになっているのだろうか。

「良い学習者」としての教師像

教師もまた生徒同様、英語を学ぶ一人の学習者として自身が「良い学習者」(土屋、29)である必要がある。しかし、それは英語に関してだけではない。教師は、学生の「個性、才能、特性」といったものを的確に把握し、尊重する必要があるが、それと同様に教師自身もまた自己のそうしたものに対して正しい認識をもつことが重要であろう。教育法の研究において客観

的データはあったほうがよい。集められたアンケートの結果の分析、あるいは統計的な数字での可視化は有益であろう。しかし、教師は数字自体の検討であるよりは、まず目の前にいる学生の顔をしっかりと見つめ、態度に注目することが重要となるのである。

M. カナーレイ(M. Canale)とM. スウェイン(M. Swain)によれば、「コミュニケーション能力」とは、下記のような4点の下位能力からなりたっているからである。

以下、土屋の議論を参考にし、それにそって話をすすめていきたい。

「コミュニケーション能力」 (communicative competence)

- (1) 文法能力 (grammatical competence)
- (2) 社会言語学的能力
(sociolinguistic competence)
- (3) 談話的能力(discourse competence)
- (4) 方略的能力(strategic competence)
(土屋、44-45)

上記の下位能力を検討すれば、(1)の語彙、文型・文法、音声・文字を含めた言語形式を操作する能力、つまり広義の「文法的」能力だけでは、コミュニケーション能力には到底、つながらないことがわかる。その能力にまで到達するには、従来のように言語形式にのみ偏った教育ではなく、各発話場面に応じた的確さ、コミュニケーションを続行する力が求められる。そのような見地からすれば、何を伝達するのかに重点がおかれたコミュニケーション・ランゲージ・ティーチングは、コミュニケーション能力の養成には最適な教育法であると思われる。そしてこの教授法では、コミュニケーション自体が重要であり、そこに主眼をおくかぎり教授法の選択の幅は教師に一任されている(土屋、44-45)とするなら、教師が自身の「個性、才能、特性」を大いに発揮して、自らが「良い学習者」として工夫する必要も出てくるだろう。

そしてまた教師は「インタラクション」(Interaction)の重要性も認識すべきである。インタラクション、つまり「相互交渉」はコミュニケーションの活動の場における意味の交渉であり、教師と学生、あるいは学生同士のメッセージの確認、調整作業であって、アウトプットの場を整えるという意味において重要である。それは多くの場合、言語習得におけるオーラル・インタラクションという、英語学習上の一つの技術である(土屋、226)のだが、しかし、英語教育を離れて、字義通りの「コミュニケーション」にとっても重要なものとなろう。それはまた教師と学生との距離を縮めるのに有効な活動となるからである。

「英語教育」は、二重の意味において人間と密接な関わりをもつといえる。第一に、教育は(それは教育全般にいえることだが)人間を対象にしたものであり、第二に、英語教育は、「コミュニケーション」を、教授上の一つの手法として用いるが、それは人間の基本的、かつ非常に重要な能力であると考えられるからである。

ウィドウソンもまた TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) は、本来、人間と関わるものである、として以下のように言及している。

TESOL is concerned with human beings. In certain respects they are all alike: bodies come in all shapes and sizes, but they all consist of the internal organs, so medical technology can be effectively and predictably applied. Human brains are basically the same whatever head they are in. Human minds are not, and this in many ways is inconvenient. So you can try to make them the same by making them conform to findings, and in effect operating on them as if pedagogy were a kind of brain surgery or genetic engineering.

(Widdowson, 2000, 3)

先に引用した、ウィドウソンの1978年の提案、つまり教師が「言語」自体への正しい認識をもつことの必要性は、四半世紀を経た2000年の上記論文では、確実にもう一つの認識へと向かっているように思われる。

ここでは、ウィドウソンは、人間の脳はどんな頭のなかにあろうと基本的には同じだが、人間の心、精神(human minds)は違っている、と考える。人はそうした「不都合」を是正するために、あたかも教育が「脳外科手術」(“brain surgery”)か「遺伝子操作」(“genetic engineering”)でもであるかのように新しい教育法に合致させることによって、生徒の「心」の均一化をはかつてはならないと警告する。ここでもまた「脳外科手術」「遺伝子操作」といった彼の過激な比喩は読者の意表を突くのだが、「教育」とは、そもそも「人間」に密接に関係するものである、とするウィドウソンの主張は十分納得のいくものとなるのである。

結び：学生が理想とする 「コミュニケーション」と「楽しい授業」

最後に「教育法」(受講生：将来教職希望の2年生7名)のクラスで行ったアンケートの回答とそれを分析することによって、本論の結びにかえたい。

以下はアンケートの質問とそれに対する回答である。

質問「自分が英語教師になった場合、どのような授業をしたいですか？」

上記の質問に対して、以下に受講生全員の意見を総括しているように思われる1回答例をまず紹介し、この回答の補足として、他の学生たちの意見を部分引用し、主だった具体例を示すことにしたい。

総括的な回答例

- ・これまで自分が勉強してきた指導法のいいところ取りをした授業が理想的であるように思われる。具体的には、コミュニケーション・ランゲージ・ティーチングやコミュニケーションを重視する PPP 等。アクティブな授業がよいと思われるので、ずっと教科書にかじりつくのではなく、CLIL のように他の科目を英語で試したり、ペアワークやゲームを通して生徒自身が英語を身につけていくような授業。

補足としての具体例

- (1) 中・高等学校の英語授業に対する不満、あるいは批判

今回、自分の「理想の教師像」を描くに当たって、自分が中・高等学校で受けた（おそらく訳読法と思われる、あるいは、少なくとも学生自身が「訳読法」であると認識している）英語授業を、あたかも一種の「反面教師」であるようにみなして、それに対する批判、その修正から自分の「理想の教師像」を引き出している学生が2名いた。

しかし、これは訳読法への直接的な批判というよりは、むしろ以下に述べるような発信型英語授業に対する興味・期待の大きさの裏返しの表出とも解釈できるであろう。

- (2) 発信型英語授業への興味・期待

- ・生徒が各自、英語を話す練習ができる多くの機会
- ・グループワークやペアワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、ゲームやクイズ形式の工夫
- ・生徒があまりストレスを感じなくてすむような、自然に英語に慣れさせるナチュラル・メソッドのような授業

- (3) 異文化の重視

- ・外国の歴史、国民性、食文化、風俗、習慣等の紹介等

異文化に関しては、2名の学生が外国に対する興味、憧れも含めて詳細に記していた。

- (4) 教師の人間的側面の重視

- ・なるべく教師と生徒の距離を近くして親密な信頼関係を築く
- ・自由に発言でき、質問、意見交換できるような授業環境を整える

過去におけるさまざまな教師との出会いと授業体験を、自分の「理想の教師像」の原点として、教師の人間的ありかたに関心を示し、教師たちと自分との共感的なつながりに対する感動を詳細に記す回答もあった。

そして全回答のなかで特に突出していた2項目がある。7名の全員が強調していたのは、「コミュニケーション」の要素が多く、「楽しい授業」にしたいという希望であった。興味深いことにこれら2つの項目は、相補的にみなされているのか、一対で併記されている場合が多かった。学生の頭のなかでは、あたかも「英語のコミュニケーション」＝「楽しい授業」の構図が描かれている観があった。彼女たちが描く将来の理想の授業とは、とりもなおさず、学生が現に教師に望んでいる「理想の授業」でもあるだろうから、そこにはいくぶん他力本願的な期待もみられたが、学生が描くそうした理想（あるいは、意欲）は、英語教育の核心をついているように思われる。

「英語のコミュニケーション」＝「楽しい授業」という構図は、当然、新しい教授法への興味・期待がそうさせるのだろうが、しかし、そこには単なる英語の教授法や授業の枠を越えた、さらに本質的なものへの跳躍をうかがわせるものがある。つまり学生たちの「コミュニケーション」への期待は、それが英語、日本語あるいは

は何語でなされるにしろ、彼女たちが、互いの自己意志の表明の可能性、意志疎通の重要性を認識し、相互理解の可能性を信じており、またそれらが「楽しい」ものであるはずだと確信していることの一つの表象としても読み取れるからである。実際、学生が描く「英語のコミュニケーション」＝「楽しい授業」という構図は、「コミュニケーション」＝「楽しい」といった、さらに普遍的、そして人間が社会生活を営んでいく上で、さらに本質的なものへと転換する可能性は大いにある。

教授法に関連させていえば、前述したように、内容言語統合型学習 (CLIL) は、コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング (CLT) の考えかたをさらに推し進めた最新の教授法であり、文字通り、「内容」と「言語」を「統合」した学びであるのだが、この学生たちは「英語」(言語)によるコミュニケーションを通して、「人生全般にかかわるコミュニケーション」(内容)というものの重要性、そしてその可能性もまた学びはじめているかもしれない。これもまたある意味、自然発生的な「内容言語統合型学習」といえるだろう。

ウィドウソンのウイトと文彩に満ちた教育論に比較すれば、今回の学生たちの回答の表現は実に素朴なものだが、しかし、素朴にすぎないわけでは決してない。なぜなら、学生たちの描くそうした理想の教育は、将来、教育というものが、(ウィドウソンが危惧するような)「脳外科手術」や「遺伝子操作」に陥らずにすむ可能性を確実に示唆していると思われるからである。

引用文献

- Canale, M. and Swain, M. (1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing." *Applied Linguistics* 1, 1-47.
- Widdowson, H.G.(1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford UP.

- , (2000) "TESOL: Art and Craft." *The Journal of the Imaginations in Language Learning and Teaching* 5. <http://www.njcu.edu/cill/vol5/widdowson.html> 閲覧日 2019年7月20日。
- 川本祥也、佐藤臨太郎 (2011)「PPP 授業と TBL 授業の文法学習における効果の比較検証」『教育実践総合センター研究紀要』20, 95-100 奈良教育大学。
- 森田真生 (2015) 『数学する身体』新潮社。
- 土屋澄男他 (2011) 『新編英語科教育法入門』研究社。
- 経団連 (日本経済団体連合会) 「2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」<http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf> 閲覧日 2019年8月14日。